

「船上シンポジウム2005」開催ご挨拶

平成7年1月17日の阪神・淡路大震災から10年。壊滅的な被害に遭った神戸市・神戸港は、国をはじめ関係各界のご支援を得て、復旧・復興への途を歩んでまいりました。

この震災10年を機に、神戸市においては市民が震災で学んだ「経験・教訓」、この10年間に取り組んできたことの「成果・課題」、それらを踏まえた「これからの神戸づくり」を震災時にいただいた多くの支援への感謝を込めて、市民・事業者・行政が「協働と参画」の理念に基づき、それぞれ主体的に発信する「震災10年神戸からの発信事業」を昨年12月から今年12月まで1年間にわたり実施いたします。

神戸港においても、港の復興支援への感謝を表し、神戸港の復興を内外へ発信するため、港湾関係官庁・海事関係団体などで構成された「震災10年神戸からの発信事業」みなとの実行委員会を組織して神戸港事業「神戸港からありがとう」を展開してまいります。本日の「船上シンポジウム2005」においては、趣旨や内容を鑑み、航海訓練所・神戸大学海事科学部のご理解を得て、同事業のイベントに位置付けさせていただきました。この場をお借りしましてお礼申し上げます。

阪神・淡路大震災を体験した神戸市民や神戸港関係者は、未だ忘れられない感謝の心を持ち続けております。いち早く災害支援に駆けつけていただきました航海訓練所の練習船「海王丸」「北斗丸」「銀河丸」。そして、被災者の避難場所を確保され、練習船との連携を図りながら避難者への給水・給食活動にご尽力された神戸商船大学（現在の神戸大学）。また、余震の続くなかも練習船で鍛えられた統制力とシーマンシップで救助活動を展開され、付近の倒壊家屋から住民100人以上を救出した商船大学白鷗寮の学生。

以上のことを思い起こしますと「自然災害にも活用できる練習船の機能」をテーマとした船上シンポジウムの開催は、震災10年の節目を迎えた神戸港にとりまして大変意義深いものです。本日は災害・船舶・陸上の各視点からご講演をいただきますが、練習船の備える船内設備や機動力などの優位性は、災害時においても、その機能が如何なく発揮されることをあらためてご認識いただけるものと考えます。最後になりましたが、教育、防災、海事など多くのご関係者にお越しいただきありがとうございました。熱心なご聴講と活発なご質疑を賜りますようお願い申し上げます、開催のご挨拶とさせていただきます。

平成17年2月15日

「震災10年神戸からの発信事業」みなとの実行委員会副委員長
神戸市みなと総局長 小柴 善博